

保温効果で生育促進

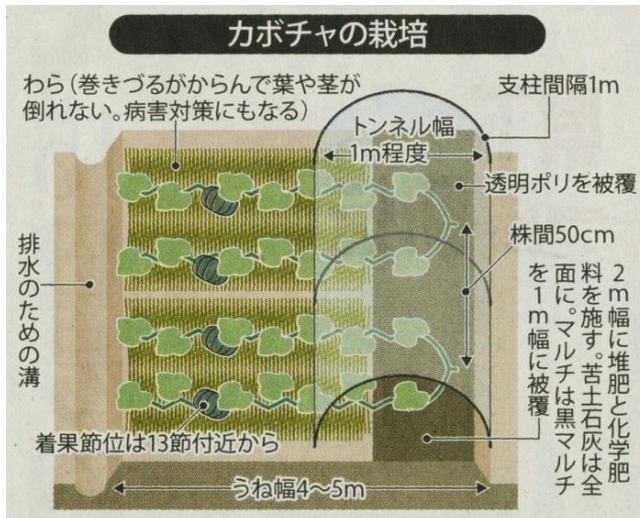
—— 満留克俊

カボチャの原産地はアメリカ、熱帯アジアで、日本には16世紀にポルトガルから伝来し、九州から栽培が広まったといわれています。

カボチャは、カロテン、ビタミンC、カリウムなどの栄養素を豊富に含んでおり、代表的な緑黄色野菜として知られています。

用途は煮物、揚げ物、スープなど幅広く、ベビーフードや高齢者向け食材としても重宝されています。

鹿児島県の生産量は、全国で北海道に次ぐもので、一部産地は、かごしまブランド品目にも指定されています。



今回は甘みの強い「エビス」などの西洋カボチャを対象として、手軽に栽培が楽しめる小型のトンネルを利用した早どり栽培を紹介したいと思います。

トンネル栽培は、被覆用のトンネルフィルムを使用します。トンネルの保温効果が生育を前進させ、露地栽培に比べて1カ月程度早く収穫できます。

カボチャの発芽適温は、25～30度、生育適温は17～20度です。苗はホームセンターなどで市販されているものを利用します。3月に定植を行うと、6～7月に収穫ができます。

本ぼには1平方メートル当たり、苦土石灰100グラム、堆肥3キログラム、化学肥料100グラム（三要素15%の場合）を目安として施します。

うね幅4～5メートル、株間50センチに植え付け、本葉3枚の時に先端の芽を摘む摘心をして、つるを2本伸ばします。

トンネルの幅は1メートル程度で、透明ポリフィルムを被覆します。霜が予想される場合は、ポリフィルムの上から不織布などをかぶせます。トンネル内の温度は、定植後は日中25度、夜間10～15度を目安に、トンネルを開閉することで管理します。

つる先は、うねに直角またはななめに誘引し、最初の果実を13節付近に着果させます。上手に育てると、1本のつるに2～3個着果します。着果節位以下の側枝は取り除きます。

授粉は外気温が高くなってミツバチなどの昆虫が活動を始めるまでは、雄花を用いた人工授粉が必要です。降雨が予想される場合、前日の夕方につぼみの先が黄色くなった雄花を摘み取って水に挿し、翌日に開花させて用います。

収穫は、完熟巣で収穫する場合、開花後50～55日程度です。収穫後2週間～1カ月くらいが食べごろになります。

（鹿児島県農業開発総合センター園芸作物部野菜研究室主任研究員）